（緊急報告）

コロナ危機が問う自然・人間・文明

The Questions Raised by the COVID-19 Crisis Concerning Nature, Humans, and Civilization

古沢広祐
FURUSAWA, Koyu

はじめに

2020 年に入って間もなく、人間社会は未曽有の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック（世界的感染爆発）に襲われた。世界保健機関 (WHO) がパンデミックと認定した 3 月 11 日時点では、感染者数が約 5 万人で死者数が 4 千人余りとなりその約 4 分の 3 は中国国内であった（武漢市の封鎖は 1 月 23 日）。それが 1 か月半ほどで世界中に感染が拡大し（約 300 万人規模）、死者数が 20 万 3044 人（2 万人をこえる死者数の国は、米の 5 万 4 千人を筆頭に伊、西、仏、英の 5 カ国）となった（米ジョンズ・ホプキンス大学システム科学工学センター集計、4 月 26 日時点）。この間の国別の感染者の推移は図 1 の通りであり、データの不確実さはあるものの事態がいかに急速に拡大したかがわかる。

事態の推移は、まさに現在進行中であり予断を許さないが、この度の危機の深刻さは人間社会を様々な側面から大きく揺るがす極めて奥深いものである。この事態を総合人間学会としてどう受け止めるか、まさに学会の存在意義がとわれる事態ではなかろうか。すでに多くの識者が深刻さを「コロナ危機」と受けとめて、多様な問題提起を発信し始めている。総合人間学会としても今後、総力を挙げてこの危機に対する見識を深めるべきではないかと考え、ここに緊急報告するものである。コロナ危機という未曽有の事態に全世界が翻弄される最中、現時点での状況認識ではあるが、危機が内在する自然・人間・文明のあり方への根源的な問いかけに関して報告したい。今後の学会活動において、進行中のコロナ危機に関する学会の諸研究が多面的・多角的に展開していく契機になれば幸いである。

さまざまな角度からコロナ危機をめぐっては多種多彩な問題提起がなされているが、総合人間学というトータルな視点からのアプローチを重視する意味から、まずは出来るだけ全体状況を把握しつつ、さまざまな論点や視点を俯瞰することから始めたい。筆者としては、様々な立場の諸論の単に寄せ集めるだけでは全体状況への深い理解には至らないと考える。そのため、ここでは人間存在を 3 層構造でとらえる視点をベースにして報告させていただき

たい。

人間存在の 3 層構造とは、1）〔底層〕自然・生物的土台、2）〔中層〕社会・経済的土台、3）〔上層〕精神・文化的土台として重層的にとらえる視点である。人間という存在は、生物的存在として悠久の時空間（宇宙）的スケールの一端に位置している存在であるが、同時に現代の社会経済システムとして現在進行形的に社会を編成・形成している存在でもあり、さらにそのことを認知・共有する世界認識主体（精神・文化的存在）として現に在る（私の中に世界があり世界の中に私もある）ということである（古沢 2018）。

コロナ危機は、以下に見ていくように、この 3 つの土台を大きく揺さぶる事態を生じている。さまざまな論点を分かりやすく整理する意味で、3 つの土台に対応する項目立てとして、（1）自然・生命系における論点、（2）社会経済システムにおける論点、（3）精神・文化的な論点の 3 つの視点から、コロナ危機について詳しく見ていくことにしよう。

今後については、状況分析とともに危機の後に現れる世界として、大きく 3 つのシナリオが想定できるだろう。すなわち、悪循環的な危機の進行、現状維持と回復、従来システムの改善や根本的変革である。実際上は、この 3 つがまだら模様のように展開し、当面は流動的な事態が進展していくだろう。期待としては、危機を契機に諸矛盾の見直しや根本的変革を展望したいのだが、危機がさらなる矛盾を拡大させ破局的事態を招くことも懸念される。

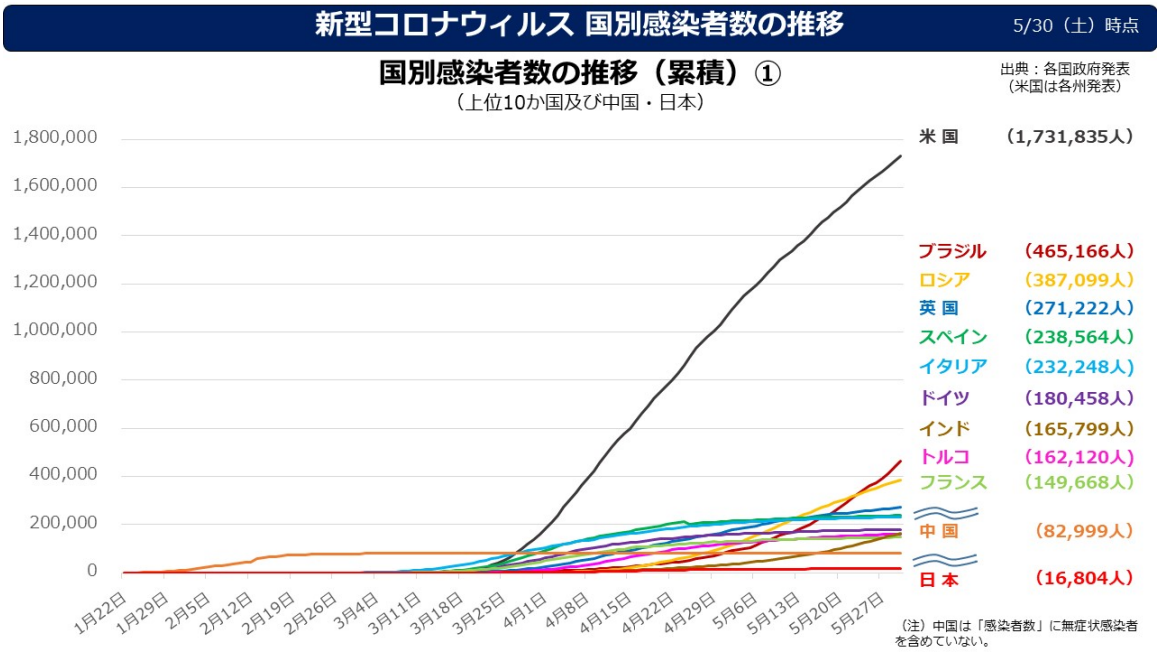

図 1: 世界の感染者の推移
出典：外務省ホームページ：https://www.anzen.mofa.go.jp/covid19/country_count.html（閲覧日 2020 年 4 月 27 日）

1．　自然・生命系において問われる論点

新型コロナの爆発的感染拡大に、私たちの世界は震撼した。わずか数か月でこれだけの事態が出現することは大方の予想を超えた出来事である。しかし徴候的には、新型インフルエンザ（1918 年スペインかぜを筆頭に何度も流行）、エボラ出血熱（1976 年）、エイズ（後天性免疫不全症候群・HIV、1981 年）、SARS（重症急性呼吸器症候群、2003 年）、MERS（中東呼吸器症候群、2012 年）、鳥インフルエンザ（2013 年）などが、新型・新興感染症の出現として警戒されていた。とくに新興感染症の多くが動物由来感染症であり、今回の新型コロナ感染症（COVID-19、ウイルス名は SARS に近いとして SARS-CoV-2）の起源としてはコウモリやセンザンコウなどが疑われている。

もともと人類の歴史は、長らく感染症との戦いの歴史であったと指摘されてきた。その過程では、動物由来の感染症との長い付き合いがあり、文化・風習の形成や、人間集団の勢力圏の攻防においても大きな影響を与えてきた。近代以降、急激な人口増加における人類の大繁栄は、栄養改善とともに公衆衛生や抗生物質の利用による感染症の克服が大きく貢献した。それはここ 2 百年余りでの出来事であり、ワクチン開発が 1798 年、細菌の発見が 1876 年、ウイルスの発見が 1898 年（電子顕微鏡による実物確認は 1932 年）、抗生物質の発見が 1928 年であった。こうした近代医療の発展と普及が大きな効果を発揮したことで、一時期には人間は感染症との戦いに勝利したとの楽観論も現れた。だが、最近はそうした楽観論は影をひそめている。それどころか、抗生物質への耐性菌問題の出現や、変異する感染ウイルスの脅威を前にして、ウイルスの反乱（ヘニッグ 1996）、ウイルスとの戦い、人類の天敵ウイルスなどの言説が生まれたり、恐怖心や敵視する風潮も出始めている。(1)

他方、新たな感染症の出現は、人間自身が問題を深刻化させてきた側面も指摘されている。たとえば「感染症が多発する原因の第一に、人間による自然破壊を挙げなければならない」（石 2014,2018）などの指摘がある。大規模な自然破壊での生息地を失った野生動物が病原体を拡散する事態や、従来は隔たりを維持してきた野生の自然への大幅な介入が誘因となったとの指摘である。また近年の野生生物の商業的取引・利用拡大（ペット他）も引き金になっている懸念もあり、自然保護団体からの規制強化をもとめる動きが起きている。さらに、野生生物への過度な危険視や排除（駆除）の動きも生じている。これらの動きは、人間と感染症、細菌やウイルスとの関係を狭い利害関係や対抗関係でのみとらえる傾向をもつ。だが、他方ではより根源的に状況をとらえ直して、従来の生命・自然観を問い直す視点も新たに生まれている。(2)

従来の狭い人間中心主義に対する問い直しである。それは近年さまざまな視点から提起されており、たとえば腸内細菌をはじめ土壌や海洋の無数の微生物たちが想像以上の巨大な世界を構成していることへの再認識であり、コペルニクス的世界観の変革とでも言うべき動きである。例えば人間を構成する細胞数の約 37 兆個に対して、体内・体表面には約 100 兆個

もの細菌や菌類が住み着いており、複雑な共生・共存・対抗関係の中で私たちはバランスを保っている存在ではないかとの認識である。海の中でも海洋生物の全体の半分以上 9 割近くを微生物が占めているという（ブレイザー 2015、モントゴメリー 2016）。自己増殖できない超微細なウイルスに関しては未知なことが多いが、その不可思議さとともに巧妙な働きが明らかにされつつある。その量的な試算での興味深い指摘としては、「海のウイルス全体に含まれる炭素の量は 2 億トン、シロナガスクジラ 7500 万頭に相当する膨大なものになる。仮にウイルスをつなげると、全体の長さは 1000 万年光年になる」というのである。(3)

ウイルスの起源や働きに関しては研究が活発化しており、微生物から大型生物まで種の壁をこえて遺伝子を伝搬させる働き（遺伝子の水平伝搬）があること、その働きに注目してウイルス進化説まで登場するなど、不可思議な働きをめぐって議論が続いている。ウイルス感染で進化が起きるのではないかとの実例としては、哺乳類が胎盤形成を獲得した過程でウイルス感染が関与していた事例が明らかにされている。さらに真核生物の誕生・進化に巨大ウイルスが関与していた可能性も指摘されており、議論は尽きないのが今日的状況である（武村 2017）。(4)

悠久の生物進化のドラマにおいては、私たちの日常世界の常識を超えたダイナミズムが内在していること、こうした認識をもつことは、既述した人間存在の底層の世界認識に新たな視点を提示することでもある。実際のウイルス感染で甚大な被害を生じる事態への対処は、人類の英知を結集して取り組まねばならない。その視点は、既述した中層レベルでの人間世界内の立場として当然のあり方である。そうした対処を前提としつつも、一歩さがってウイルス危機の事態をどう受け止めるかについては、私たちの存在の底層部分（悠久の世界）において新たな視点を獲得する契機なのかもしれない。人間存在に関し、従来の枠組み（世界観）を超えた生命観や自然に対するより深い認識をもつことで、未来を生きるための新たな世界観への道が開かれる。それは危機に対する向き合い方の土台の再構築であり、次なる地平を拓くための新視点となるのではなかろうか。

2．社会・経済・政治システムにおける対応

今回の新型コロナウイルスは、現代のグローバル社会にまさしく適合（フィット）して直撃し、猛威をふるっている。それは、急拡大するグローバリゼーションへの警鐘でもあり、従来の発展のあり方に質的転換ないし構造変革を迫る出来事である。近年、同時多発テロ（2001 年）、リーマンショック（世界金融危機、2008 年）、東日本大震災と原発事故（2011 年）、多発する自然災害（気候変動関連）、今回のコロナ危機と、グローバル危機と呼ぶべき事態が続発している。各出来事は背景や性格は異なるが、現代世界の発展様式に深く根差した矛盾の発現として見ることができる。

とくにコロナ危機が明らかにしたことは、従来の経済発展のあり方への問い直しであった。この危機の甚大さは今後の行方にかかっているが、すでにリーマンショック以上の 1930

年代の大恐慌に匹敵するとの懸念も出されている。問い直しの視点とは、これまでの世界が経済利益と効率中心に都市化が加速され、グローバルな世界都市の形成を頂点に周辺地域が「中心—周辺」的に編成されてきた世界に対する批判的視座である。詳細は省くが、一極集中、無限成長・拡大型システムから分権・自立システムへの軌道修正（脱巨大都市化）へ、個人主義的な物的消費による拡大・膨張経済から適正規模のコミュニティ経済へ、利己・自己中心から社会配慮・公正や協働的価値の重視へ、といった発展様式への問い直しが起きている。地域のあり方としては、農山漁村が大都市に従属するのではなく、里山・里海ルネッサンス的な展開方向、自立・分権・コミュニティ重視の「グローカル」社会の形成、産業構造としては、第 1 次産業を基本におく多元的価値を実現する自然共生社会の見直しへの契機となり得るかが問われている（古沢 2020）。

コロナ危機後に現れる政治体制については、歴史学者のユヴァル・ハラリが指摘するように、中国のような強権的な全体主義（統制・監視）社会に向かうか、民主・市民（自立自治）型社会に向かうか、大きな岐路に立つと考える。危機への迅速で効果的対応として、個人情報・スマホ利用等でのデジタル情報活用が効果を発揮したことから、今後はデジタル経済やオンラインでの諸活動が急速に普及すると思われる。それが権力集中（監視社会）へと傾斜するのか、民主・市民自治型に展開しうるか、選択が迫られる。民主・市民型と言っても、市場経済的対応（個人主義・ビジネス重視）か社会民主的対応（自治・ミュニティ・連帯重視）かで異なるだろう。当面は政治・経済体制の違いで、その対応や制度がどう機能したかの結果が問われることになる。その際、社会が内在していた諸矛盾がコロナ危機を通して浮き彫りになることで、社会的対立が激化するかもしれない。(5)

さらに、リスク対応や矛盾の深刻化をめぐって、現在の資本主義経済の見直しに至るかもしれない。危機対応と脱却にむけての取り組みについては、グローバルショックにより被った巨額の経済的損失の補償について、各国対応を基本としつつも、経済恐慌に陥らないよう抜本的な国際連帯・協調対応が必要となることも予想される。

具体的には、巨額の軍事費を削減して経済支援に振り向ける新ニューディール（平和の配当）政策などが検討されてよかろう。グローバル経済で築かれ蓄積されたてきた富の再分配政策が求められるのである。すでに T・ピケティ等が提起してきた国際的な資産課税の強化や金融取引税の整備など、グローバル再分配政策とも言うべき対応である（グローバル税財政変革、ピケティ 2014）。つまり 1930 年代の世界恐慌期に打ち出されたニューディール政策の新バージョンであり、抜本的な制度変革としてグローバルリスクへのグローバル対応策が必要とされる時代が予想されるのである（アタリ 2018）。しかし、ここでも分岐が起きて、排他主義や自国優先による負の連鎖（共倒れ）に傾斜していくことが危惧される。

3．精神・文化的な対応について

危機を前にして人間の奥底に潜む醜さと尊さが現れるというが、改めてカミュの小説『ペスト』（1947 年）などが世界的に再評価されている。社会的危機が人々の心理や行動に大きく影響する事態が、コロナ危機でも顕在化している。昔から疫病などの目に見えない恐怖が、人々の不安心理を増幅させ、差別や他者攻撃（排斥、暴力）を誘発してきた歴史は数多くあった。今回のコロナ危機でも内外で垣間見られている。身近な例では、人々の通常行動や開店店舗などに過敏に反応する「自粛警察」（過剰注意）といった行為や、SNS 上での偏見・非難・中傷行為も話題になっており、感染者や親族のみならず医療関係者への差別的な行為も生じている。国際的にも外国人・民族差別的な行為が報道されている。(6)

他方で、冷静に危機を見つめ、人間社会のあり方を問いかける発言が世界的に共感を呼んでおり、希望の灯を感じさせる。その一例を挙げて、本稿を閉じることにしたい。本稿は、緊急報告である制約から精神・文化面での対応に関しては未検討部分が多くあるため、導入的な提起、報告にとどめる。今後の学会活動において、学会員からの多彩な問題提起や論点提示を期待したい。

以下は、中国・武漢在住の女性作家、方方さんの「武漢日記」からの引用である。(7)

> 「‥‥ひとしきりの疫病で、無数の人間模様が暴露されました。そして中国各地の役人の基本的レベルもあらわになりました。さらにわれわれの社会の疾病も露呈しました。これは、今回のコロナウイルスよりもたちが悪く、いつまでも治らない疾病です‥‥」（1 月 30 日）。
>
> 「‥‥一つの国家が文明的かどうかを計る尺度は、高層ビルが多いとか、車が速いとか、強大な武器や軍隊を持つとか、発達した科学技術、優れた芸術、派手な会議や光り輝く花火や、全世界を豪遊し、モノを買いあさる観光客が多いかどうかではない。尺度はたった一つ。それは、その国の弱者に対する態度なのです‥‥」（2 月 24 日）

注

(1) 國井修「人類と感染症、闘いと共存の歴史（全文）」Newsweek 緊急公開、Yahoo!ニュース、2020.03.30
https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20200330-00010009-newsweek-int
新型コロナウイルス感染症について（日本ウイルス学会）：
http://jsv.umin.jp/news/news200210.html,
http://jsv.umin.jp/news/news200410.html
人獣共通感染症・連続講座（日本獣医学会）：
https://www.jsvetsci.jp/veterinary/zoonoses/index.php

(2) 石弘之「人類の天敵ウイルス（2）：感染症の続発要因は自然破壊と過密社会」Nippon.com 記事、

2020.03.27 https://www.nippon.com/ja/in-depth/a06602/
「感染症と野生生物　新型コロナウイルスの問題によせて」2020.02.27
https://www.wwf.or.jp/staffblog/activity/4256.html
コロナ危機と環境に関する国際情報サイト：ジュネーブ環境ネットワーク（GEN)、Updates on COVID-19 and the Environment：
https://www.genevaenvironmentnetwork.org/covid19.html
【ダニ博士が語る】新型コロナウイルス発生の裏にある “自然からの警告” 動画 17 分
https://m.youtube.com/watch?feature=share&v=1g3Y36z772Q&fbclid=IwAR3X_Sa2sIwGXVb9Rcc-iAvNX8ElSOX-hO8G_G91RxOCSIc7TImg0TTE0VA
(3) 山内一也「自然界でのウイルスの生態」連続講座・人獣共通感染症、第 169 回、2006.02.02
https://www.jsvetsci.jp/05_byouki/prion/pf169.html
(4) 武村政春「巨大ウイルスが生物進化に深く関わっていた!?　研究最前線レポート」現代ビジネス・記事、2017.05.07 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/51643
永井俊哉「ウイルス進化説は正しいか」永井俊哉ドットコム、2017.03.25
https://www.nagaitoshiya.com/ja/2017/horizontal-gene-transfer-in-evolution/
(5) ユヴァル・ノア・ハラリ「新型コロナウイルス後の世界とは？」FINANCIAL TIMES 紙記事、全文翻訳を公開。http://web.kawade.co.jp/bungei/3473/
藤原辰史「パンデミックを生きる指針—歴史研究のアプローチ」B 面の岩波新書、2020.04.02
https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic
James Riney「新型コロナウイルス後の世界を予想する（1)：逆都市化」Coral Insights、2020.03.31 https://www.coralcap.co/2020/03/predicting-life-after-covid-19/
岡田充「“新型コロナ後の世界” に 2 大変化。強権政府の復権とグローバルリーダーアメリカの退場」BUSINESS INSIDER JAPAN、2020.04.08
https://www.businessinsider.jp/post-210714
津田大介「コロナ禍でこそ連帯の意味、我々は知る」朝日新聞・論壇時評、朝刊 2020.04.30
https://www.asahi.com/articles/DA3S14460039.
知の巨人ジャック・アタリ氏が語る「コロナ後の世界」-YouTube 2020.04.28
https://www.youtube.com/watch?v=H72gYXzM-bQ
知の巨人イアン・ブレマー氏が語る「コロナ後の世界」-YouTube 2020.04.29
https://www.youtube.com/watch?v=nu0Eyzoekgo&feature=youtu.be
「コロナ危機と文明の転換」公開動画（ゲーテ・インスティトゥート東京)、第 3 回「コロナ危機による国内回帰とグローバリゼーション」2020.04.17
https://www.goethe.de/ins/jp/ja/kul/sup/202.html
【特集】新型コロナウィルス関連記事・コンテンツ（東京財団)：https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=3385&utm_source=mailmaga_20200423&utm_medium=email
(6)「強まる偏見、感染防止の妨げに　専門家「敵はウイルス」」日本経済新聞、朝刊 2020.04.22
https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58342110S0A420C2CE0000/
河合薫「新型コロナが引き出した大衆の深層心理の闇」日経ビジネス・記事、2020.03.10
https://business.nikkei.com/atcl/seminar/19/00118/00065/
(7)【地球コラム】「封鎖解除の武漢、コロナ「記憶」は消し去られるのか」時事ドットコム、2020.04.12 https://www.jiji.com/jc/article?k=2020040800766&g=int
（ネット情報の最終閲覧日は 2020 年 4 月 30 日）

参考文献

石弘之（2014）『感染症の世界史』洋泉社。（角川ソフィア文庫版、2018 年）。
ジャック・アタリ（2018）『新世界秩序』山本規雄訳、作品社。
武村政春（2017）『生物はウイルスが進化させた　巨大ウイルスが語る新たな生命像』講談社（ブルーバックス）。
デイビッド・モントゴメリー/アン・ビクレー（2016）『土と内臓　微生物がつくる世界』片岡夏実訳、築地書館。
トマ・ピケティ（2014）『21 世紀の資本』山形浩生訳、みすず書房。
古沢広祐（2018）「「総合人間学」構築のために（試論・その 1）—自然界における人間存在の位置づけ」『総合人間学研究』第 12 号（オンラインジャーナル）。
古沢広祐（2020）「逆転した産業ピラミッドを正し、第 1 次産業を基本とした自然共生社会へ」『新型コロナ 19 氏の意見』農文協ブックレット、農山漁村文化協会。
マーティン・J・ブレイザー（2015）『失われてゆく、我々の内なる細菌』山本太郎訳、みすず書房。
山本太郎（2011）『感染症と文明』岩波新書。
ロビン・マランツ・ヘニッグ（1996）『ウイルスの反乱』長野敬・赤松真紀訳、青土社。

［ふるさわ こうゆう／國學院大學客員教授／環境社会経済学・持続可能社会論］